

耶律楚材の辺塞詩について

白　蓮　杰

一 はじめに

元代初期の代表的詩人耶律楚材（一一九〇—一二四四）、字は晋卿、号は玉泉、法号は湛然居士という。遼（契丹）の太祖耶律阿保機の長男である東丹国王耶律倍九世の末裔で、遼の王族出身である。耶律楚材は『湛然居士文集』十四卷、『西遊録』一卷、『湛然居士集』三十五卷、『西征庚午元曆』二卷、『曆説』二卷、『五星秘語』一卷、『先知大数』一卷、『麻答把曆』一卷、『弁邪論』一卷、『皇極経世義』一卷、『元風慶会録』一卷など天文、地理、律曆、術数に関する多くの作品を残したが、現在伝わっているのは『湛然居士文集』十四卷と『西遊録』一卷のみである。

『湛然居士文集』^{〔1〕}は耶律楚材の唯一の詩文集であり、約六百八十六首の詩と、七十二篇の散文が収められている。詩は主に近体詩であり、七言律詩五百四十一首、五言律詩七十四首、七言絶句四十一首、五言絶句一首である。詩のスタイルは主に、友人の詩に唱和したもの、歴史の人物を歌った詠史詩、宗教に関する禅詩と西域の風景を描いた辺塞詩などである。中でも、人々に広く知られているのは、一二一九年から一二二七年までチンギス・ハ

ンの西征に随行した際、目にした西域の自然風景、サマルカンド尋思干の人々の生活習慣や文化を描いた辺塞詩の作品である。本稿では、耶律楚材の辺塞詩はどのような性格を持つのか、そして、辺塞詩の歴史の中で彼の作品をどう評価すべきかについて考えてみたい。

二 辺塞詩をめぐる論議

辺塞詩は、漢民族と周辺の異民族との国家紛争と文学スタイルの多様化に伴って生み出され、様々な変化を見せてきた。しかし、今日に至るまで、辺塞詩とは何か、どのようなスタイルを持つものなのか、いつから作られてきたのかについては、国内外の多くの研究者によつて議論されてきたにもかかわらず、未だはつきり定まっていないように見受けられる。

「辺塞詩」という言葉の由来について、佐藤保「辺塞詩概観―唐代の辺塞詩を中心に」と尾形幸子「『辺塞詩』分類の成立―中国古典詩分類に関する一考察」⁽²⁾は、辺塞を詠う詩を初めて詩歌の内容別分類に設けたのは、北宋の李昉らの編纂した『文苑英華』であることを指摘し、その巻二百九十九の「軍旅一」に「辺塞五十四首」があるという。また、同時代の姚鉉「唐文粹」巻十二・詩三・樂府辭上においても「辺塞三十三首」、巻十七上・詩十一・古調歌篇七に「辺塞三首」が見えることが述べられている。

『文苑英華』の巻二百九十九の「軍旅一」には、「講閔三首」、「征伐十九首」に並び「辺塞五十四首」が収められている。そこには李益「過五原至飲馬泉」、「塞北行次度破訥沙」、「上黃堆峯」、「送客還幽州」、「早發破訥沙」等五首、岑參「度嶺」、「碩頭頂送李判官入京」、「發臨洮赴北庭留別」等三首、高適「營州」、「王之渙「涼州」等々盛唐の詩人の作品が採録されており、旅人の故郷を思う気持ちもいくばくかは反映されているが、題目は多く地

名を用い、主に中原と異なる辺塞の風景を描いた作品が多く見受けられる。同じく『文苑英華』の卷三百の「軍旅二」に「辺將六十四首」が収められており、辺境に関わるものが大きく「軍旅詩」と捉えられているが、その中においても、辺境の風景を詠ったものは「辺塞」、戦争の有様を詠ったものは「征伐」、戦争で手柄を立てようとする將軍の気持ちと戦いぶりを詠ったものは「辺將」と、内容別に細かく分けており、「辺塞」を一つの独立した下位分類として扱っている。一方、『唐文粹』に収められている「辺塞三十三首」と「辺塞三首」は、「樂府辭」の項目に分類されており、もっぱら出征兵士の旅の辛さと故郷を思う気持ちを描いた作品に傾いている。

詩に関する逸話と評論である詩話においては、「辺塞詩」を「辺塞曲」、「辺塞」としているのは、明の楊慎『升菴詩話』の卷四「耳衣」に「唐人辺塞曲：『金裝腰帶重，錦縫耳衣寒。』耳衣，今之暖耳也。」と見えるほか、清の施補華『峴傭說詩』『秦時明月』一首、『黃河遠上』一首、『天山雪後』一首、『回樂峰前』一首、皆辺塞名作、意態絶健、音節高亮、情思悱惻、百詠不厭也。」に見える。一方、清の沈德潜『唐詩別裁集』卷四「李益」小伝に「君虞、辺塞詩最佳。」と記され、「辺塞詩」という、熟した言葉が使われている。

『文苑英華』と『升菴詩話』及び『峴傭說詩』に取り上げられる「辺塞」の作品は、主に辺境の風景を詠い、詩人の辺境に対する憧れの心情を表わしたものであり、筆者の本稿に取り上げる「狭義の辺塞詩」と重なるものであることを先に示しておきたい。

次に、辺塞詩の定義及び内容については主に以下のような三つの論説がある。

何寄澎『総是玉関情—唐代辺塞詩初探』は「今按、既称之為『辺塞詩』、顧名思義、則顯然可見、凡詩中所叙述的与辺塞有関、就应当視之為辺塞詩。」と指摘している。すなわち詩の中の叙述が辺塞に関わるものをすべて辺塞詩と見なすべきだとする意見である。

また潤岩氏と市川桃子氏の中国唐代文学学会第二回年会における報告によれば、辺塞詩の定義をめぐる議論では二つの意見が出されている。一つは、辺塞に関わるすべての詩を辺塞詩というもの、もう一つは、辺塞での戦争、辺塞での生活、風光を反映したすべての詩を辺塞詩と見なすべきとするものである⁽⁴⁾。

さらに蘇珊玉『盛唐辺塞詩的審美特質』は、「本文所挙の辺塞詩、主要從充滿『辺塞情懷』為著眼点、既包括描写辺塞戦事、塞外風光的詩歌、也包括描写辺塞地区的風俗民情、戍卒的生活和思想情緒的詩、以及对辺疆形勢、辺將功過的述評⁽⁵⁾」、すなわち主に「辺塞情懷」に満ちていることを着眼点とし、辺塞で行われた戦争の場面や塞外風光を描写したものの、また、辺境の人々の風俗民情、兵士の守備生活と心情、さらには辺境情勢、辺境將軍の功勞と罪過などを評価した作品を辺塞詩とみなしている。

筆者は、何氏及び潤氏・市川氏の主張する辺塞詩、すなわちいささかなりとも辺塞に関わる作品一般を、広義の辺塞詩としたい。このように広い意味で捉えた辺塞詩は、辺塞における兵士の辛さと悲しみを基調とするものであり、その対象は従軍生活や戦争の有様を描いた従軍詩だけではなく、夫と離れ離れになった妻の寂しい思いを詠った閨怨詩など幅広く含む。またその起源は、漢代楽府の「上之回」、「戰城南」、「隴頭水」、「関山月」、「出塞」、「入塞」、「従軍行」、「苦寒行」、さらに『詩経』の小雅「采薇」、「六月」、「采芑」、衛風「伯兮」、王風「君子于役」、秦風「無衣」などの従軍体験を描いた詩にまで遡りうるだろう。

一方、蘇氏の主張する詩人の辺塞への情熱的な心情を詠ったものを狭義の辺塞詩と称したい。狭い意味で捉えた辺塞詩は、盛唐の辺塞詩を中心とし、中原と異なる辺境の風物を主として描き、辺境のロマンに心惹かれる詩人の心情を詠ったものである。広義の辺塞詩と狭義の辺塞詩について具体的な例を見てみよう。

〔采薇〕

采薇采薇 薇を採り 薇を採る

薇亦作止 薇も亦た作ふ

曰歸曰歸 帰らんと曰ひ 帰らんと曰ふ

歲亦莫止 歳も亦た莫れぬ

山に入つて薇をあちらこちらと採り進む、春になつて薇が生えていたのである。戎を征伐するために遠くへ出征してきたが、いつか歳も暮れようとしている。

薛道衡「出塞」(遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷四)

高秋白露團 高秋 白露団やかなり

上將出長安 上將 長安より出ず

塵沙塞下暗 塵沙 塞下暗く

風月隴頭寒 風月 隴頭寒し

空高く澄み渡る秋、折しく露は白くまろやか。そのときに、総大将が長安より出発だ。巻き上がる砂塵に塞のあたりはうす暗く、吹く風、冴え渡る月光、隴山の山頂は寒さがきびしい。

王翰「涼州詞」(『全唐詩』卷一五六)

葡萄美酒夜光盃 葡萄の美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催 飲まんと欲すれば 琵琶 馬上に催す

醉臥沙場君莫笑 酔うて沙場に臥すとも 君 笑うこと莫れ

古來征戰幾人回 古來 征戰 幾人か回る

赤い葡萄酒がガラスの杯になみなみと、いざそれを飲もうとすると、うながすように、馬上から琵琶の調べが起る。たとえ酔いしれて沙漠に倒れ付してしまっても、君よ、私を笑わないでください。昔から、出征して無事に故郷に帰れた人が何人いると言うのか。

右に挙げた「采薇」は、兵士の苦勞と故郷を想う気持ちを詠い、「出塞」は守備生活の厳しさと辛さを描いており、異郷に対する詩人の憧れの心情が示されていないため、辺塞に関わるという点から見れば、広義の辺塞詩と言えるが、厳密に言えば、辺塞詩の先駆と見なすべきだろう。

一方、王翰の「涼州詞」は、出征して故郷や家族のもとに無事には帰られないかもしれないという征人の悲壮な思いを描いているだけではなく、さらに「葡萄酒美酒」・「夜光盃」・「琵琶」・「沙場」など、異郷の風物を積極的に取り入れ、異郷に対する詩人の甘い情緒や感傷的情調を示したところが先の二篇と異なる。

筆者は、王翰の詩に見られるような、異郷の風物を詠いながら、異郷の風土に対する詩人の好奇心と憧れの心情を詠ったものを特に辺塞詩として扱いたい。このような狭い意味の辺塞詩が誕生した時代は盛唐であった。

三 盛唐の時代背景と辺塞詩

玄宗治世の開元・天宝年間を中心とする盛唐期は、社会経済の繁栄を基盤として、歌舞音楽、絵画工芸などの諸芸術が発達した。社会の安定や科挙制度の着実な運用により、文人、士大夫の地位は相対的に高くなり、人々の文学にかける情熱は増大し、詩人の数が圧倒的に増え、質も高くなった。そこで初唐に完成した近体詩の諸形式が定着し、従来の古体詩とともに、中国の古典詩が、形式と内容の両面において、豊かな多様性を獲得するようになった。そのなかで、盛唐期を中心とする辺塞詩の流行は、唐詩の重要な特徴となった。初唐末から盛唐の

時期、唐王朝は周辺の異民族との政治関係が比較的安定し、中原と西の貿易も盛んになった。シルク・ロードを通じて西域の珍しい文物が中原に入ってきたうえ、人々の沙漠の彼方にある異郷に対する認識が変化しつつあり、関心が強く向けられるようになった。

この時代、右のような機運に応じるかのように、王之渙、王翰、高適、岑参、李益など有名な辺塞詩人が出揃い、兵士の心情と戦争の有様を描く楽府の旧題を出発点としながらも、異郷の目新しい自然風景や生活習慣に目を向け始めた。そこで、従来の従軍詩、楽府とは趣が異なる異郷への憧れの気持ちを歌った辺塞詩が誕生し、流行した。彼らの辺塞詩は、たとえ戦争の旅の困難を歌い、出征兵士の悲哀を歌う作品であっても、感傷的な美しさや情熱的な強さを秘め、異郷に対する憧れの気持ちを表したものであり、所謂盛唐の辺塞詩の特色を示している。具体的な例を見てみよう。

高適「营州歌」(营州の歌) 『全唐詩』卷二二四

营州少年愛原野 营州の少年 原野を愛し

狐裘蒙茸獵城下 狐裘 蒙茸 城下で獵す

虜酒千鍾不醉人 虜酒 千鍾 人酔わず

胡兒十歲能騎馬 胡兒 十歳より 騎馬を能くす

营州の若者たちは広々とした原野を愛し、毛がふさふさと乱れている狐の皮ころもを着て郊外で獵をしている。異郷の酒を千杯飲んでも酔うことはない。胡の若者は十歳のころから巧みに馬を乗りこなすのだ。

岑参「火山雲歌送別」(火山雲歌送別) 『全唐詩』卷一九九

火山突兀赤亭口 火山 突兀たり 赤亭口

火山五月火雲厚　　火山　五月　火雲厚し

火雲滿山凝未開　　火雲　山に滿ちて凝りて未だ開かず

飛鳥千里不敢來　　飛鳥　千里　敢えて来らず

火山は赤亭の前に聳え立っている。五月の火山に火の雲が厚くかかり、山の至る所にあまねく行きわたって立ち込める。その恐ろしさに怯え、飛ぶ鳥は千里をわたつてくることはないだろう。

右に挙げた高適と岑参は、実際に西域に赴いた経験を持つ詩人であり、辺塞詩の代表詩人として高く評価されている。右の詩において、高適は西域の若者たちが自由闊達に生活している様子を歌う。岑参は五月火山の熱さが最高潮に達している時、夏雲が恐ろしく厚くたちこめている有様を描写し、詩人の驚きの気持ちを書き下す。それまでの漢魏、六朝、初唐の詩には、主に果てしのない荒涼たる沙漠、皮膚を切り裂くような冷たい風や雪などが描かれていたが、盛唐の辺塞詩はそこから抜け出して異郷の生き生きとした有様を描き、従来見られなかった新しい詩の世界を切り開いたと言える。

しかし、中唐以降は安祿山の乱によって社会は混乱し、そのうえ、中原と周辺の異民族との政治関係が不安定となったため、人々の西域への関心は薄れてしまい、盛唐の辺塞詩は衰えていった。唐以降も辺境にかかわりを持ったわずかな詩人によって作られた辺塞詩が残っているが、盛唐の辺塞詩に及ばないためか、或いはそれと明らかに違う傾向を具えているためか、国内外においても、あまり研究されていないようである。

四 耶律楚材の辺塞詩

盛唐以降、宋、金を経て、異郷の風土に対する憧憬を詠う盛唐詩の傾向を受け継いだのは、耶律楚材である。

彼の作品の多くは西域にいた時に作られたものであるため、数多くの詩の中に西域に関する描写がしばしば見られるが、辺塞詩として知られている作品は、河中府を中心として詠った「西域河中十詠」、「壬午西域河中遊春十首」、「河中遊西園四首」、「河中春遊有感五首」、「過閩居河四首」、「過陰山和人韻」、「過金山用人韻」、「贈蒲察元帥七首」、「西域蒲華城贈蒲察元帥」など四十三首である。その中で、「西域河中十詠」は五言律詩、「過陰山和人韻」は七言律詩三首と五言律詩一首からなっており、そのほかの詩はみな七言律詩である。

耶律楚材の辺塞詩については、参考文献が少ない中、最近宋曉雲「辺声四起唱大風——耶律楚材与元代絲綢之路文学」⁽⁶⁾と霍彤彤「不妨終老在天涯——耶律楚材風土詩的價值」⁽⁷⁾などの論文が出され、いずれも中国の古典詩史における耶律楚材の功績について論じている。しかし、右記の論文は、いずれも耶律楚材の辺塞詩を分析して評価しつつも、それらを「辺塞詩」ではなく、「絲綢之路文学」や「風土詩」としている。

思うに、一般的に辺塞とは辺境の砦の意味であるが、辺塞詩で歌われている辺塞とは、主に北から西にかけて暮らしている異民族の地域に限定されている。中でも最も多く歌われているのは、中央アジアを横断する東西交通路であるシルク・ロードである。そのため、ここで言う「絲綢之路文学」は所謂「辺塞詩」と重なるものだと考えられる。しかし、霍氏の主張する「風土詩」は「辺塞詩」と必ずしも重なるものではないと思われる。中国の古典詩において、詩の題材に基づく分類には田園詩、山水詩、閨怨詩、宮体詩、辺塞詩などがあり、風土——その土地の生活風習、気候、地形などを民謡風に詠じたものは竹枝詞の範疇とされている。一方、耶律楚材の作品は西域の異民族の生活風習を主として描いている点においては、風土詩と称することは可能かもしれないが、本稿では作品全体のスタイルとテーマから考え、辺塞詩としたい。また、宋氏と霍氏は辺塞詩の起源を漢代とし、辺塞にかかわるすべてのものを辺塞詩としているところが筆者の意見と異なる。

(1) 耶律楚材の辺塞詩の特色について

この節において、耶律楚材の辺塞詩は何を詠っているのか、そしてそれまでの辺塞詩とはどう違うかについて触れたい。

耶律楚材の著『西遊録』(一二二八年)によると、耶律楚材は一二一九年から一二二七年の間、漠北から西へ出発し、アルタイ山脈を超え、別石把⁽¹⁰⁾、不刺城⁽¹¹⁾、阿里馬城⁽¹²⁾、塔刺思城⁽¹³⁾、苦蘆城⁽¹⁴⁾、八普城⁽¹⁵⁾、可傘城⁽¹⁶⁾、芭欖城⁽¹⁷⁾、訛打刺城⁽¹⁸⁾、尋思干⁽¹⁹⁾、蒲華城⁽²⁰⁾、阿謀河⁽²¹⁾、斑城⁽²²⁾、搏城⁽²³⁾、黒色印度城等々西域の大地に足を踏み入れた。(四〇頁の地図を参照されたい)。

その結果、詩に歌われた素材は幅広く、西域の山や川、異民族の文化、生活習慣(食器、衣服、食物、料理など)、気候(季節における珍しい現象)、社会の仕組み(税金に関する制度)等々を詳細に描写し、異郷に対する新鮮な気持ちと好奇心が作品の中に読み取られる。さらに、詩の内容はみな、詩人の実体験に基づいているため、実像感がある。

過陰山和人韻 其三 (陰山を過ぎり人の韻に和す 其の三)

八月陰山雪滿沙 八月の陰山 雪 沙に満つ

清光凝目眩生花 清光 目を凝らせば 眩みて花を生ず

挿天絶壁噴晴月 天を挿す絶壁 晴月を噴き

擎海層巒吸翠霞 海を擎ぐ層巒 翠霞を吸う

松檜叢中疏吠畝 松檜の叢中に 吠畝を疏す

藤蘿深處有人家 藤蘿の深き処に 人家有り

横空千里雄西域　空に横たわること千里　西域に雄たり

江左名山不足誇　江左の名山も　誇るに足らず

八月の陰山はすでに雪が沙陀にいつぱいである。月の清らかな光をじっと見つめっていると、目がくらんで霞が生じてしまうようになる。高い天空を絶壁にさしはさんで、晴れた月を嘖き出し、広い滄海を重なり連なった山にささげ、みどりの霞を吸うといったイメージが湧き立たせられる。松や檜の森の中に、田のみぞと畝を開き、藤かずらの深くまつわるところに人家が見える。まことに、天空に横たわる千里の陰山の姿は西域地方における雄岳である。これに比べれば、揚子江の下流地方にある名山も誇るに値しないほどである。

王国維『耶律楚材年譜』によれば、この詩は一二一九年に、丘処機がアルマリクで金山よりの旅程を詠んだ「自金山至陰山紀行」詩に和したものであり、生まれて初めて目にした陰山の雄々しさと美しさに対する詩人の驚嘆を詠ったものである。ここに描かれた陰山は単なるイメージ的なものではなく、実像としての臨場感をにじませている。

陰山は中原の地と北の匈奴の地を隔てる山脈であり、古くから「出塞」、「入塞」、「塞下」などの楽府作品に多く詠われてきた。代表的な作品としては、唐の太宗李世民の「飲馬長城窟行」「塞外悲風切、交河水已結。瀚海百重波、陰山千里雪」（塞外の秋風は身を切るように冷たく、交河には既に氷が張っている。ゴビ砂漠に百層の波が連なり、陰山は千里に渡って雪で覆われている）と、王昌齡の「出塞」「秦時明月漢時關、萬里長征人未還。但使龍城飛將在、不教胡馬度陰山。」（秦のときから照る明月、漢のときにもあつた関所、万里の道を遠征してきた兵士達は、まだ故郷へ帰れない。もし龍城に飛將軍の名をとどろかせた李広のような名将がいたならば、胡の騎兵に、陰山を越えて侵入されることはなかっただろうに）が挙げられる。しかし、楽府作品に描かれた陰山は、具

体的な描写はされておらず、ただ異民族の地域のシンボルとして詠われているものである。

また、耶律楚材の辺塞詩には、西域の風物と異民族の生活風習を描写したものが多し。この類の作品群と、それまでの辺塞詩や楽府詩に詠われてきた西域の風景を比較しておこう。

贈蒲察元帥七首 其七（蒲察元帥に贈る七首 其の七）

閑乘羸馬過蒲華 閑に羸馬に乗りて 蒲華を過ぎり

又到西陽太守家 又到る 西陽の太守の家

瑪瑙瓶中簪亂錦 瑪瑙の瓶中に 乱錦を簪め

琉璃鍾裏泛流霞 琉璃の鍾裏に 流霞を泛ぶ

品嘗春色批金橘 春色を品嘗して 金橘を批し

受用秋香割木瓜 秋香を受用して 木瓜を割る

此日幽歡非易得 此の日の幽歡は 得易きに非ず

何妨終老住流沙 何んぞ妨げん 老いを終ふるに 流沙に住むを

そぞろに瘦せ馬に乗り蒲華城を訪ね、また西陽太守の家に行ってきた。瑪瑙製の瓶の中に綴れの錦をあつめ、瑪瑙製の盃の中に棚引く霞を浮かべる。春の景色を賞味して品定めをし、秋の金橘の味わいを批評するように。高い香りの菊をとり、木瓜の実の酸っぱさを厭う。この日の奥深い喜びは、容易に得ることはできない。こうした喜びを味わえるならば、老年期をここで過ごしてもよいではないかと思う。

この詩は、蒲察元帥に招待されたときの宴会の様子を描き、西域に訪れた者だけが享受できる異郷の楽しさを詠っている。「瑪瑙瓶」、「琉璃鍾」、「金橘」、「木瓜」など西域の具体的な品物や果物を描写することによって、西

域の人々の生活の豊かさや心のこもったもてなし振りがうかがえる。前に挙げた王翰「涼州詞」の「葡萄酒」、「夜光盃」、「琵琶」、「沙場」などの言葉が備えていた、感傷的でロマンチックな情調はひかえられ、西域の人々の実際の生活状況をことさらに飾ることなく、ありのままにかつ鮮やかに映し出している。

贈蒲察元帥七首 其四（蒲察元帥に贈る七首 其の四）

使君排飴宴南溪 使君 飴を排べ 南溪に宴せしむ

不枉從君鳥鼠西 枉げず君に従ふ 鳥鼠の西

春薤旋澆濃鹿尾 春薤 旋澆し 鹿尾濃く

臘糟微浸軟駝蹄 臘糟 微かに浸み 駝蹄 軟らか

絲絲魚膾明如玉 絲絲たる魚膾 明なること玉の如く

屑屑雞生爛似泥 屑屑たる鶏生 爛るること泥に似る

白面書生知此味 白面の書生 此の味を知らば

從今更不嗜黃齏 今よりは更に 黃齏をたしなまざらん

食卓には、春の薤がとりまき、こつてりとした酒肴の最上食品が並べられ、暮れにしばらくあげたお酒が、かすかにしみこんで軟らかくなった駝蹄の煮込みがある。春雨のように細かに切り込んだ魚の刺身は、透き通って玉のように綺麗で、こまごまになった雞のひき肉が煮崩れて泥のようになってい

其五

筵前且盡主人心 筵前に且く尽くす 主人の心

明燭厭厭飲夜深 明燭に 厭厭として 夜深きに飲む

素袖佳人學漢舞 素袖の佳人 漢舞を学び

碧髻官妓撥胡琴 碧髻の官妓 胡琴を撥つ

輕分茶浪飛香雪 輕く茶浪を分かつてば 香雪飛び

旋擘橙盃破軟金 旋し橙盃を擘げれば 軟金破る

五夜歡心猶未已 五夜歡心すれど 猶未だ已まず

從教斜月下疎林 さもあらばあれ 斜月 疎林に下る

白い袖の美人は漢舞踊を学んで舞い、官庁に仕える西域人の舞姫は、胡琴を弾き鳴らしている。かおりたてた茶とわずかに離れるかのように、お茶の飛沫をあげ、橙盃を押し退け、純金の盃を打ち破るかのように見える。

西域の人々の生活風習を描いた作品は、樂府詩には全く見られないが、盛唐の辺塞詩には、岑参の「酒泉太守席上醉後作」が挙げられる。

琵琶長笛曲相和 琵琶 長笛 曲相和し

羌兒胡雛齊唱歌 羌兒 胡雛 齊しく歌を唱う

渾炙犁牛烹野駝 犁牛を渾炙し 野駝を煮る

交河美酒金回羅 交河の美酒 金回羅 (『全唐詩』卷一九九)

琵琶と長い笛の音が合い響き、えびすの人たちは声を揃えて歌う。牛肉を丸焼きして駱駝肉を煮、現地の作った葡萄酒を金の酒器に入れて飲む。

右に挙げた耶律楚材の「贈蒲察元帥七首」と岑参の「酒泉太守席上醉後作」の両篇は、素材が大体重なっている。耶律楚材は盛唐の詩人の詩のあり方を意識して詠っているように思われる。その一方、「素袖佳人」、「碧髻」

など、歌姫や舞姫の容貌と服装の具体的な描写は盛唐の作品より豊富だと感じられる。

さらに、「素袖の佳人漢舞を学ぶ」の一句に見られるように、中原と西域の文化がしつくりと溶け合い、一体となっている様子を詠うことは、辺塞詩の中において、大変珍しい光景であり、「四海従来皆兄弟」の志を持つ、耶律楚材ならではのインスピレーションだと考えられる。

最後に、中原の人々には知られていない満ち足りた平和な社会を詠いつつ、西域の土地に対する詩人の愛着感を表している作品を挙げよう。これも耶律楚材の辺塞詩の一つの特色である。

西域河中十詠 其三（西域河中十詠 其の三）

寂寞河中府 寂寞たる河中府

遐荒僻一隅 遐荒 一隅に僻す

葡萄垂馬乳 葡萄は 馬乳に垂れ

杷欖燦牛酥 杷欖は 牛酥に燦く

釀春無輸課 春に釀すも 課を輸す無く

耕田不納租 田を耕すも 租を納めず

西行萬餘里 西行万余里

誰謂乃良圖 誰か謂はん 乃ち良図あるを

河中府は、ひっそりとしている。辺僻な片すみにある遠い未開地のゆえであろうか。葡萄は、垂れ下った馬乳のように豊かな房を見せており、杷欖は鮮やかにミルクのような膚を見せている。酒を醸造しても税金の割り当てなどなく、田を耕作しても租税を納めなくて済む。都より西に行くこと万余里の地に、こうした平和な郷があっ

たことを、これまで誰も口にした者がいなかった。

其六

寂寞河中府 寂寞たる河中府

西流緑水傾 西流して 緑水は傾く

衝風磨舊麥 衝風に 旧麦を磨し

懸碓杵新粳 懸碓に 新粳を杵す

春月花渾謝 春月に 花渾て謝し

冬天草再生 冬天に 草再び生ず

優游聊卒歲 優游として 聊か歳を卒へん

更不望歸程 更に 帰程を望まず

河中府は、ひっそりとしている。西流で緑の水を汲み、疾風を利用して古い麦をひき、碓にかけて新しい粳を根付く。春の月に咲き出した花は、みんな散りはて、冬空に草が再び萌え出でる。こんなところでゆったりとして、暫く年月を過ごしたものである。この上帰る旅程のことなど、未練がましくいついつと望みますまい。

其十

寂寞河中府 寂寞たる河中府

遺民自足糧 遺民 自ら糧足れり

黄橙調蜜煎 黄橙に 蜜煎を調へ

白餅糝糖霜 白餅に 糖霜を糝す

漱旱河爲雨

早に漱げば 河雨と爲り

無衣壠種羊

衣無ければ 壠に羊を種ふ

一從西到此

一たび 西のかた此に到りしより

更不憶吾郷

更に吾が郷を憶はず

河中府は、ひっそりとしている。国が減びて後に遺された民は食糧を何とか自給自足している。黄橙を蜜でつけた食品に調理したり、白餅を白砂糖に塗したりして。そして早に口すぎ、河の流れを雨とみなし、木綿の衣服などないが羊の毛で服を作つて着る。私は一度聖上にお伴して西方のこの地にきているが、この地の遺民の生活状態を見てみると、望郷の念にちつともかられることはない。

河中府はチンギス・ハンが尋思干に設置した軍事基地である。この詩には河中府の人民の豊かな生活を描き、「鶏舌肉、馬首瓜」などの特産物、「酒を醸造しても税金の割り当てなどなく、田を耕作しても租税を納めないで済む」などという西域の風習、「夏の六月には、いつも雨が降らず、かえつて冬のさなかに雷雨がある」、「春の月に咲き出した花は、みんな散りはて、冬空に草が再び萌え出でる。」といった不思議な気候、「食糧は、斤単位の量り売りであり、貨幣がないため主食の麦で交易している。」といった貿易の仕方、「黄橙を蜜でつけた食品に調理したり、白餅を白砂糖に塗したりして食べる。」といった料理の仕方、「早に口すぎ、河の流れを雨とみなし、木綿の衣服など着るに由無し」といった自給自足の生活を細かく描き、広く知られていない西域の生き生きとした有様を、中原の人々に伝えたいという気持ちがかがえる。さらに、右記三首の詩の最後の一句は、耶律楚材の西域に対する親しみと愛着感を詠っており、従来の辺塞詩と異なる耶律楚材の文学の趣を表している。

(2) 耶律楚材の辺塞詩の独自性について

耶律楚材の辺塞詩は、詩の内容において、それまでの辺塞詩と異なる特色を具えているほか、詩の表現においても、特異性があると考えられる。

壬午西域河中春遊十首 其二（壬午西域河中にて春に遊ぶ十首 其二）

三年春色過邊城 三年の春色 辺城に過ぐ

萍跡東歸未有程 萍跡の東帰 未だ程有らず

細細和風紅杏落 細細たる和風に 紅杏 落ち

涓涓流水碧湖明 涓涓たる流水に 碧湖 明らかなり

花林啜茗添幽興 花林に茗を啜りて 幽興を添え

緑畝觀耕稱野情 緑畝に耕すを觀て 野情を稱え

何日要荒同入貢 何れの日にか 要荒より 入貢を同じくし

普天鐘鼓樂清平 普天 鐘鼓もて 清平を樂しめん

そよそよと吹くのどかな春風に揺られて紅い杏子が落ち、さらさらと流れそそぐ水が、青い湖に入り込み、湖面は澄明そのものである。私たちは、花園でお茶をすすりながら、奥ゆかしい趣を添え、緑のあぜで耕作を眺めては、田舎の趣を褒め称える。

春、河中府の旅で、花園でお茶を飲みながら目にした風景を詠じた詩である。湖のほとりの花園で春風に吹かれながらお茶を飲み、天に連なる緑の大自然を目いっぱい楽しんでいた時、紅く実った杏が目の前に落ちてくるという描写は、読者を臨場感に満ちた世界へと導き入れる。この詩の描写は前に挙げた陰山を描いた雄壮な雰囲気

気と異なり、紅（紅杏）、碧（碧湖）、緑（緑叡）など鮮やかな色合いを巧みに調和させ、異郷の自然の美しさをより一層際立たせている。

河中遊西園四首 其二（河中の西園に遊ぶ四首 其二）

河中風物出乎倫 河中の風物 倫より出づ

閑命金蘭玉翠巡 閑かに金蘭に命じて 玉翠を巡らしむ

半笑梨花瓊臉嫩 半ば笑む梨花 瓊臉嫩く

輕颯楊柳翠眉新 輕く颯む楊柳 翠眉新し

銜泥紫燕先迎客 泥を銜む紫燕 先づ客を迎え

偷蕊黃蜂遠趁人 蕊を偷む黃蜂 遠く人を趁う

日日西園尋勝概 日日西園に 勝概を尋ね

莫教辜負客城春 客城の春を辜負せしむることなかれ

窓外には、半ば咲きの梨花が、玉のように美しい顔を見せており、また、軽く眉をしかめたようなしだれ柳が、みどり色の新鮮な葉をみせている。泥をくわえた燕が、先に客人を迎えるかのように戸口に舞下り、花の蕊に深く身を寄せる蜜蜂が、遠く客人の後ろについてゆく。

この詩においては、詩の対象物である梨花、楊柳、燕、蜂など植物、鳥、虫類を人間になぞらえる擬人法が多用され、たとえば「泥を銜む紫燕、先づ客を迎え、蕊を偷む黃蜂、遠く人を趁う」の二句などのように、西域の人々の人情味を巧みに浮かび上がらせている。

右記の詩に見られるように、耶律楚材の辺塞詩は詩の表現において、色彩と言葉の美しさを追い求め、色鮮や

かな詩の世界を作り上げている。一方、盛唐詩に見られたような、悲壯感あふれる情熱的な心情や、異境の風物に対する憧憬の詠出などはひかえられているため、いささか淡泊な感は否めない。

五 終わりに

西域の風物を描き、それらに対する詩人の感動と異境への憧れを歌う辺塞詩は、盛唐の高適、岑参らによって生み出され、流行し、やがて衰退した。元の耶律楚材はその詩風を受け継ぎ、辺塞詩と山水詩のあり方を組み合わせ、一つに構成し、新たな境地にまで発展させた。しかし、耶律楚材以降、彼の詩風を継承する者は現れなかったため、一つの潮流を形成することはなかった。ところが、後の清の紀昀の「烏魯木齊雜詩」や、二十世紀の五十年代から八十年代を初めとし、聞捷の「天山牧歌」、「河西走廊行」を代表作とする新辺塞詩を比較して見ると、耶律楚材の詩のあり方を受け継いだ痕跡が認められる。この点については別の機会に論じたい。

耶律楚材の作品に描かれている西域の事物は、盛唐の辺塞詩と重なるところもあるが、中原の人々に知られてなかった西域の情報の人々の耳元に届けたいという積極的な気持ちが強く込められているように見受けられる。また、盛唐詩に見られたような感傷的な叙情性はひかえられ、西域の人々の生活が様々な角度から、素朴ながらも詳細かつ鮮やかに活写されている。また一方では、色彩感あふれる絵画的な美しさを追求した作品もあり、西域を詠う作品のなかにも多様なありかたを展開させたと言えるであろう。

耶律楚材の作品は辺塞詩の中でも独創性を備えており、そして、従来の辺塞詩のありかたを發展させ、新たな詩の世界を作り上げた点においては、古典詩史において一定の意義を認めることができるように思う。

注

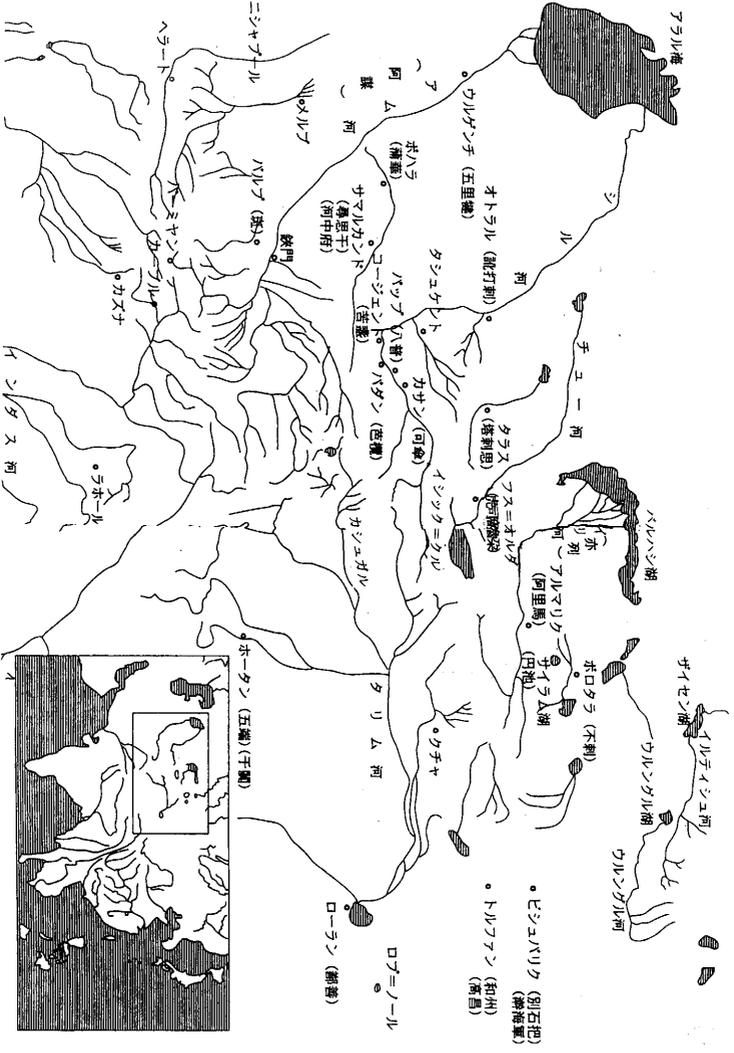
- (1) 本稿に引く耶律楚材の詩は、謝方点校『湛然居士文集』（中華書局 一九八六年）に拠った。
- (2) 佐藤保「辺塞詩概観―唐代の辺塞詩を中心に」（漢文研究シリーズ9 尚学図書 一九七九年）と、尾形幸子『辺塞詩』分類の成立―中国古典詩分類に関する一考察（お茶の水女子大学中国文学会報 十八号）から、辺塞詩の成立に関する問題について多くの示唆を受けた。
- (3) 何寄澎『總是玉關情―唐代辺塞詩初探』（聯経出版事業公司 一九七八年）は、辺塞詩の作品を、『詩経』に収められている従軍詩や、六朝の楽府にまで広げて述べたものである。
- (4) 市川桃子「中国唐代文学学会第二屆年會に関する報告―辺塞詩を主題として」（中哲文学会報 十号）、潤岩「関于唐代辺塞詩的討論綜述」（新疆大学学报 一九九二年）。
- (5) 蘇珊玉『盛唐辺塞詩的審美特質』（文津出版社有限公司 二〇〇〇年）は、盛唐の辺塞詩は辺塞心情を主として描いた点では、従来の辺塞詩と異なると述べたうえ、審美の観点から盛唐の辺塞詩を分析したものである。
- (6) 宋曉雲「辺声四起唱大风―耶律楚材与元代丝绸之路文学」（新疆大学学报 二〇〇三年）は、耶律楚材の作品は、これまでのシルク・ロード文学の内容を豊かにしたと主張したものである。
- (7) 霍彤彤「不妨終老在天涯―耶律楚材風土詩的價值」（新疆教育学院学报 二〇〇五年）は、耶律楚材の作品は元以前の西域詩の内容を一変させ、後代の西域詩に影響を与えたことを主張したものである。
- (8) 『西遊録』は、西征の途中で見聞したもの、長春真人丘処機を非難した発言を記録したもの。中央アジアでの実体験を伝えた見聞資料として知られる。
- (9) ゴビ砂漠の北方の地。現在のモンゴル人民共和国のある地方である。
- (10) 『元史』は「別失八里」と記しており、現新疆ウイグル自治区、天山の東あたりである。
- (11) 『元史・地理志・西北地附録』は「普刺」、『西遊録』は「不刺」に作る。
- (12) 新疆伊寧県北賽里木湖東或いは東南附近にあたる。
- (13) トルク語では「蘋果園」、モンゴル語では「梨」の意味であり、現新疆霍城県の西の方にあたる。

- (14) 今のカザフスタン共和国のジャンプルにあたる。
- (15) 『元史』は「忽毡」、「忽禪」、「忽纏」に作る。現タジキスタンのレニナバード「列寧納巴徳」である。
- (16) 『元史・地理志・西北地附録』は「巴補」、「西遊録」は「八首城」に作っている。「八普」はペルシア語では「門」の意味であり、現中央アジアフェルガナ盆地あたりである。
- (17) 『新唐書・西域傳』によると、フェルガナ盆地あたりの都市である。『西遊録』は「可傘」、「元史・西北地附録」は「柯散」に作る。
- (18) 『西遊録』に見える地名。「苜攬」ペルシア語では「アーモンド」の意味であり、現フェルガナ盆地のホーカンドとコージェントの間あたりである。
- (19) 『元朝秘史』は「兀答刺儿」、「兀都刺儿」、「元史・太祖本紀」は「訛答刺城」、「西北地附録」は「兀提刺耳」に作っている。シル河にアリス河が合流するあたりであり、今のカザフスタン共和国の訛提刺兒古城の遺跡である。
- (20) 『遼史』、『元史・太祖本紀』に記載があり、今のウズベキスタンのサマルカンドにあたる。
- (21) 『元史・太祖本紀』、『元史・地理志・西北地附録』は「不花刺」に作り、現ウズベキスタンのボハラ町にあたる。
- (22) アムダリアは中央アジアの大河。古名はオクサス。パミール高原に発源し、中央アジアの数力国とアフガニスタンの境をなし、転じてウズベキスタン・トルクメニスタン両共和国の境界をなし、カラクム・キジルクム両砂漠を流れてアラル海に注いでいる。
- (23) アフガニスタンの北部の地域である。
- (24) 印度西北部に住む黒肌の人々が住む仏教国と言われていたところである。
- (25) 蒲察七斤は、契丹族の耶律阿海であり、『元史』巻一百五十に伝がある。祖父の撒八兒サハルの時から金に仕え、父の脱迭兒トテヤルは尚書省奏事官として仕えていた。耶律阿海は生まれつきの優れた才能を持ちながら勇氣があり、計略に長け、馬術と弓術に長じ、諸部族の言語に通じていた。そのため、部族の間に派遣されてチンギス・ハンに面会した。何回か会うことよってチンギス・ハンの才能と力を信じ、この人なら天下を統一できると考え、遂にモンゴル部族に自ら投降した。後に宋征伐に功あり、河中府で元帥となり、東都官に任ぜられた。

(26) 『全唐詩』は「金」を「歸」に作っているが、陳鐵民・侯忠義『岑參集校注』（上海古籍出版社 一九七九年）は、「歸」は「金」の誤りだと記している。ここでは『岑參集校注』に基づいた。

(27) 耶律楚材『湛然居士文集』卷五「壬午西域河中春遊十首」其七「四海從來皆弟兄。西行誰復歎行程。既蒙傾蓋心相許。得遇知音眼便明。金玉滿堂違素志。雲霞千頃適高情。廟堂自有夔龍在。安用微生措治平。」

（はく れんけつ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）



松崎光久『耶律楚材文集』(二〇〇一年 明德出版社)
 巻末の「中央アジア主要部」より引用